様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２４日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００６～２００９
課題番号：１８３２０１０９
研究課題名（和文）　非文字知社会と中世の時間・暦・交通通信・流通に関する研究
研究課題名（英文）　The Study of Oral Traditions (collective wisdom or tacit knowledge); Time, Calendar, Transportation, Communication, and Distribution in the middle ages (12th~16th)

研究代表者
服部　英雄（HATTORI HIDEO）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
研究者番号：６０１０７５２１

研究成果の概要（和文）：時間法や航海技術を非文字知（民衆知・暗黙知）の視点で調査・分析した。時間には季節（日の出・日の入り）に無関係の絶対時間（定時法）と季節によって変わる相対時間（不定時法）とがある。不定時法が自然発生的で多用された。航海技術については、地形や潮流を知悉した航海術や漁撈法を調査・分析した。中世紀行文に記された港津発着の時間を手がかりに、当日の潮流、潮力、人力、風力を分析した。

研究成果の概要（英文）：We studied and analyzed hour method and navigational skills from the viewpoint of oral traditions (collective wisdom or tacit knowledge). We have two types of hour method. One is an absolute measurement of time, Teiji-ho: a standard hour system in which we divide a day into 24 hours, or12 toki. It is not affected by seasonal changes like the time of sunset or sunrise. The other is a relative measurement of time, Futeiji-ho: a temporal hour system during the Edo Period in which they divided a day into two (day and night) but not in half, then they divided each of these into 6. Since the length of daytime is not the same throughout the year, an hour differs according to the seasons and latitudes. This system had such a close relation with nature that it is quite natural for people to work spontaneously with Futeiji-ho in those days. As for navigational skills, We examined and dissected voyages and fishing operation in which people worked with abundant knowledge about geography and tidal currents. We consulted medieval travel writings (12th~16th century) for information on departures and arrivals. Based on those data, We tried to figure out how long it took for ships to go from one port to another, and guessed how strong the tidal currents were and the wind force was, or how oarsmen helped when they were on adverse current.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,300,000	0	3,300,000
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総　計	7,500,000	1,260,000	8,760,000

研究分野：日本史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：民衆知・暗黙知、海中地名、櫓、紀行文、地名地図電子化、香時計、常香盤、漏刻

１．研究開始当初の背景
前近代日本社会は文字による社会ではあったが、反面文盲 illiteracy が多く、非文字社会の側面も濃厚に持っており、文字によらない知識によって人々の多くが行動していた。法制度社会に対する不文律、制定暦日に対する農事暦などがその代表的なものと考える。非文字知 The oral traditions は経験知 The collective wisdom・暗黙知 The tacit dimension と表現されることもあり、ときに民衆知とも表現される。非文字知には周知された知識と周知されない知識がある。経験知・民衆知は前者に対応し、後者が「暗黙知」に対応することが多いようである。後者をも考慮しつつ、主として前者の視点（文字のない世界）から前近代、とりわけ中世社会を分析する必要がある。文献資料に依存する歴史学がもっとも不得手な分野が非文字の世界である。前近代社会総体の真のありかたを知るために、「非文字知（経験知）」の世界を追跡することは、歴史学には不可欠の作業であるし、有効な視点である。

２．研究の目的
時間・暦・交通通信・流通を非文字知の観点から分析することを目的とした。

(1)時間：古代遺跡出土木簡には時間を定めての指示が記されている。戌の刻限（午後８時頃）までの到着（福岡市下月隈遺跡出土木簡）、あるいは毎日寅の刻（朝４時前後）から田に出ての労働（加茂遺跡出土木簡）を命じられた脚力・農民は、夜であっても時間を知っていた。大宰管内では警固所から国府・大宰府への解（上申・報告）に時刻を記している。公用での飛駅（飛脚）使用に伴うものである。駅家ほか官衙、そして飛脚・脚力は時刻を周知していた。戦国時代の史料になると、配達時間を指定された飛脚史料がみえている。さきの脚力木簡もあわせ考えれば、そもそも運送に当たる脚夫は時間内に配達することが義務づけられていた。経巻筆写の奥書にも夜中の時刻が記される。寺院も時刻を把握していた。天体に依拠する日時計や、夜には北斗七星観測が考えられるが、悪天もある。どのような時計がつかわれたのか。

福岡市の鴻臚館跡から梵鐘鋳型が出土したが、国衙・郡衙・警固所・駅家などの官衙には漏刻台が常備されて、梵鐘で時刻を伝達したと推測できる。漏刻台の遺構は飛鳥水落遺跡が、水落という地名とともに、著名である。それ以外の遺構が知られていないけれども、中国都城に鼓楼・鐘楼があったように、鐘楼建物の内部に漏刻が置かれて、それを見ながら梵鐘で時を知らせていた可能性が高い。漏刻は建物内部にあったのなら、遺構として検出されることはない。

時間については各寺院の香時計など遺物の調査を進めるいっぽうで、文献の読み直しによる把握を目的とした。

(2)暦　時刻は暦と不即不離の関係にある。月の動きによった太陰暦では月の形によって暦日の大まかな認識は可能であったが、精密な暦日の認識や閏月の存在などをどのように知ったのかを検討すべく、「閏講」のような閏月の周知徹底のため行われた民間行事の存在を手がかりにしての分析を目的とした。

(3)交通通信　航海技法、港津の構造・役割の解明を目的にした。前近代の航海には沿岸航法や、天文（天測）航法による遠洋航海があった。航法・船の操作法について絵画史料、あるいは真帆・片帆・舵などのキーワードが登場する文学史料（和歌など）の再読み込み、中世紀行に記された発着時間（航海に要した時間がわかる）を復原潮見・潮流計算により分析することを目的にした。また海図利用による港津の構造・役割分析を目的にした。とくに港湾改修が大幅に進められる以前の、明治期海図の読解を行う。海図によって港湾周辺の深さや水面上には出ない暗礁（瀬）の位置を知ることができるが、これは航海する古代中世人には経験知（暗黙知）である。

３．研究の方法
上記分析視角によって調査を進めるとともに、下記の現地調査・資料収集も進めた。科研ニューズレターの配信、毎年一回の研究集会と研究発表を行った。

06（平成１８年度）902に九州大学・六本松地区にて研究集会。服部が趣旨説明と収集レトロ海図の検討結果についての報告をし、文禄慶長役の倭城が立地した朝鮮半島南岸の海がきわめて浅いこと、とりわけ順天城や馬山城周囲が浅いことを指摘し、大型艦船の停泊方法を考えた。つづいて東大史料編纂所にて収集した船に関する用語と用例の検討を行った。
報告
竹田和夫「力者」について、
服部「中世国家の貨幣発行権」9/3能古島漁協関係者から瀬・ます網について聞き取り。

070217 に九州大学・六本松地区にて第 2 回研究集会。服部が問題提起（「歴史読解における潮流知識・平家物語ほかを素材に」）ののち、九大応用力学研究所・柳哲雄教授より報告「列島周辺の海流・潮流と歴史学」。日本近海の潮流（主流・反流）、季節風などをふまえつつ、遣明船の航路を具体的に検討した。つづいて服部が問題提起（「最近の中世銭貨をめぐる研究動向」）を行い、下関市立大学・桜木晋一教授より「中世銭貨の諸問題」について報告があり、コメント・討論を行った。翌 2/18 に服部「データベースによる「刻・点」の時間記述例」について報告し、宮廷内では漏刻を使用した陰陽寮による厳密な時間管理があったこと、地方でも寺院が同様に、点までの時間管理に当たったことを報告、井上聡氏より「中世の流通社会」についての報告があって、遠隔地であっても為替による送金が可能であったシステムの具体が示された。この間流通に関した記述の多い、金沢文庫文書の紙背文書の整理作業を史料編纂所で行うとともに、これまで集積した非文字知資料である地名のデータベース化・地図化作業を行った。

080223科研集会（平成19年度）
竹田和夫1「古代・中世の交通・情報一脚力と飛脚について」2「絵画資料と歴史教育・筑前国武士館再考」
細井浩志「 暦法について」
楠瀬慶太「『政基公旅引付』にみる中世の時間」
服部英雄１「中世の船旅と潮流」　2「時刻と常香盤」
橋本 雄「東シナ海の２つの大きな海上ルート、大洋路と南島路の時期的な使い分け」

090131-201科研集会（平成２０年度）
楠瀬慶太「海の地名・山の地名と民衆知」
神谷美和「日本における大唐米の需要と推移について」
服部「中世の瀬戸内航海」
服部「中世の狩猟・牧」
金谷匡人「妙見信仰についての若干のメモ」
竹田和夫「鎌倉時代における天地災変と祈り」
橋本雄「南蛮屏風にみる港の風景」
橋本雄「この化物なーに」
細井浩志「古代の時刻制度」
井上聡「東大寺戒壇院凝然紙背に見る都鄙間交流」、「法隆寺蜂起儀式などにともなう非日常空間の創出」
服部「秀頼の父と陰陽師」

上記研究会で問題点を検討した。

４．研究成果
(1)時間
　時間には季節（日の出・日の入り）に無関係の絶対時間（定時法）と季節によって変わる相対時間（不定時法）とがある。日食月食を予知する必要があった朝廷では漏刻（水時計）を使用した。絶対時間である。しかし官吏の勤務は日の出日の入りを基本とする不定時法である。不定時法は自然発生的であり、多用された。
　香時計の所在調査により寺院や博物館で多数（常香盤）を確認した。香時計では絶対時間を測定するが、等分する目盛りを変えることができるので相対時間にも対応できた。寺では香時計による測定時間を鐘によって、周囲に伝達できた。
　つぎに時間への関心・意識を示すものとして、日記ごとの記載の差を明らかにした。京都で書かれた室町期の貴族日記（後法興院記）では時間の記述がほとんど気象、天変地異ばかりである。その理由は陰陽師からあらかじめ災異の起こる可能性のある時間を通知してくるので、実際と合致したか否かに強い関心があった。同じ時期ではあるが、京都ではなく和泉の山村で記された『政基公旅引付』の場合は何時に人が来たという記載が多く、気象記載は少ない。陰陽師の通知が来なかった可能性がある。また何刻のみではなく、何点まで書いている。宿泊所に近接する寺（円満寺）で時間がわかった。鹿児島で書かれた『上井覚兼日記』では、時間の記事は人の到来に限られていて、陰陽道の影響はなかった。

(2)暦
暦・時間については根本となった宇宙観につ

いて、渾天説・須弥山説（蓋天説）の検討から成果を得た（細井論考・刊行準備中)。

(3)交通・潮流

中世（12ー16 世紀）航海術の具体を明らかにした。中世の旅行記録『後高倉院厳島御幸記』『言継卿記』『島津家久上京日記』から出発時間、到着時間などを確認し、それを季節・月齢にあわせて潮流シミュレーションを行った（海上保安庁ＨＰ利用)。伊勢湾の場合、うまく潮流に乗った場合でも、日記の記載時間どおりに渡海するには、潮流のノット数のみでは大幅に不足する。その分、風力・漕力が重視されていた。潮流の複雑さが背景にあって、その知識体系が水軍海賊の存在基盤になった。

航海における妙見（北斗七星）の役割が大きかったことを防長の事例で確認できた（金谷論考・刊行準備中)。

地名地図

土佐の山村を対象とした楠瀬『新韮生槇山風土記』を刊行した。また佐賀県で調査収集した通称（私称）地名の電子地図化をほぼ完成させた。22 年度中に公開したい。

作成した地名地図と文献史料とを対比させる作業が可能になった。伊能忠敬は海岸部の測量日誌を残しているが、かれが書き残した地名は、現在使われていない旧字表記によっている。それはここではじめて地図化した伝承地名として残されている。伊能忠敬は豊臣秀吉の文禄慶長の役における諸大名の陣跡について記述もしているのだが、忠敬の認識と現在定着している陣跡（陣主）比定とは異なるものが多いことがはじめて確認できる。福島正則陣は従来陣と認識されていない山であるが、陣地名があった。

全体の成果については平成 22 年夏、印刷物刊行を目指している。また当初に計画した項目の内、十分調査できなかったものもあり、今後も機会を捉えて調査を進めたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

①服部英雄，海と民衆知・個人知（第一部　航海技術と民衆知・個人知)，国立歴史民俗博物館研究報告第 157 集「中・近世における生業と技術・呪術信仰」，2010 年，査読有，277～288 頁

②服部英雄，佐々成政のザラ越えと旧信濃国人・村上義長の動向-----鈴木景二氏らの試案によせて、および安房峠追補，『比較社会文化』16，2010 年，九大学術情報リポジトリ QIR ，査読無，1～8 頁
https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/

③服部英雄，昭和 30 年代・濃尾平野と周辺の中世城館,『比較社会文化』,16,2010 年，九大学術情報リポジトリ QIR，査読無，121～264 頁
https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/

④細井浩志，地の果てか、交通の要所か，旅する長崎学・海の道 13，2010 年，査読無，22～23 頁

⑤井上聡，「文字字形総合データベース作成の試み」，大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源化事業委員会『人間文化研究情報資源強化研究会報告集』１，2010 年，査読無，99～112 頁（馬場基氏と共同執筆)

⑥橋本雄，再論、十年一貢制－日明関係におけるー，『日本史研究』568，2009 年，査読有，27～40 頁

⑦橋本雄，皇帝へのあこがれ--足利義教期の室町殿行幸にみる，『アジア遊学』122，査読無，2009 年，184ー199 頁

⑧橋本雄，歴史展示、「伝えること」の難しさ，『歴史学研究』854（特集 博物館展示と歴史学--展示叙述の可能性)，2009年，査読有，9～19頁

⑨橋本雄，朝鮮に行った画僧霊彩，『アジア遊学』120（特集「朝鮮王朝の絵画--東アジアの視点から」），査読無，2009 年，162～167 頁

⑩細井浩志，陰陽寮の四人の「博士」--古代より日本の「国立天文台」を司ってきた博士たちの千年史（特集 日本の暦--旧暦の見方 楽しみ方）--（特別研究 方位・星座・信仰と暦)，『歴史読本』54(1)，査読無，2009 年，156～163 頁

⑪細井浩志，日本古代の宇宙構造論と初期陰陽寮技術の起源--特に蓋天説と漏刻をめぐって（特集 『伝来する〈知〉、変容する〈知〉/占い-願いと欲望-』ワークショップ），『東アジア文化環流』1(2)，査読無，2008 年，65～86 頁

⑫細井浩志，中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書：天体信仰と暦，『桃山学院大学総合研究所紀要』34(2)，査読有，2008 年，45～62 頁

⑬井上聡，史料紹介「萩博物館寄託『杉家文書』」，『萩博物館研究報告』3，2008年，査読無，1 ～21頁,(村井祐樹氏と共同執筆)

⑭井上聡，伯耆国東郷荘関係史料目録（稿）および史料抜粋，『荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究』,2008年，査読無，55～102頁，（清水亮氏・守田逸人氏と共同執筆）
⑮井上聡・臼井佐知子・高松洋一・新江利彦・相原佳之，デジタル化資料はオリジナル資料をこえられるか,『史資料ハブ』9号,2007年，査読無，53～79頁
⑯橋本雄，中国の師から日本の弟子へ--大宰府崇福寺円爾宛無準師範尺牘写,『東風西声』 3，2007 年，査読無，30-41 頁,図巻頭１頁

〔学会発表〕（計４件）
①服部英雄，2008 年 11 月 29 日，「前近代日本のチャイナタウン・コリアタウン」，東北アジア文化学会基調講演，釜慶大学（大韓民国）
②橋本雄，2007 年 10 月 19 日，例会報告 室町日本の対外観--歴科協大会報告へのプロローグ，『北海道歴史研究者協議会　道歴研年報』，かでる２・７会議室
③服部英雄，2007 年 1 月 18 日，チャイナタウン唐坊と宗像大宮司の日宋貿易拠点・筑前国高田牧，史学会・日本古代史部会，東京大学
④服部英雄，2006 年 10 月 1 日，蒙古襲来の新研究，七隈史学会，福岡大学

〔図書〕（計６件）
①服部英雄，アジアの中の日本（史跡で読む日本の歴史８），吉川弘文館，2010 年 7 月（印刷中）
②北島万次・孫承喆・橋本雄・村井章介（共編著），日朝交流と相克の歴史，校倉書房，2010 年，396 頁
③楠瀬慶太，怡土・志摩の村を歩く―怡土庄故地現地調査報告書Ⅱ―，2008 年，花書院,1-170 頁
④楠瀬慶太，新韮生槇山風土記，2008 年，花書院，174 頁
⑤服部英雄，峠の歴史学　古道をたずねて（朝日選書 830），朝日新聞出版,2007 年，332 頁
⑥細井浩志，古代の天文異変と史書，吉川弘文館，2007 年，360 頁

〔その他〕
ホームページ等
服部英雄のホームページ
http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~hatt/home.htm
九州大学学術リポジトリ
https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/

６．研究組織
(1)研究代表者
服部　英雄（HATTORI　HIDEO）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
研究者番号：６０１０７５２１

(2)研究分担者
井上　聡（INOUE SATOSHI）
東京大学・史料編纂所・助手
研究者番号：２０３０２６５６
細井　浩志（HOSOI HIROSHI）
活水女子大学・文学部・教授
研究者番号：３０２６３９９０
橋本　雄（HASHIMOTO YUU）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：５０４１６５５９

(3)連携研究者
柳　哲雄（YANAGI TETSUO）
九州大学・応用力学研究所・教授
研究者番号：７００３６４９０
櫻木　晋一（SAKURAKI SHINICHI）
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：００２５９６８１
金谷　匡人（KANAYA MASATO）
（当時山口県立大島高校教頭、山口県立文書館副館長）
研究者番号：
竹田　和夫（TAKEDA KAZUO）
新潟県立新潟南高校・教諭
研究者番号：
土居　聡朋（DOI YOSHITOMO）
愛媛県教育委員会・文化行政課・職員
研究者番号：
楠瀬　慶太（KUSUNOSE KEITA）
高知新聞・記者
研究者番号：